

令和7年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【上里小学校】

⑥	次年度への課題と学力向上策
知識・技能	学習したことを定着させるために繰り返し練習問題に取り組んだりその時間を確保したりすることに加えて、児童1人ひとりの実態に合わせた問題の難易度や学習方法の手立ての工夫が必要である。児童自身が自分にとって最適な学習方法を選択できるように学び方を複数提示したり、ICTを活用して自分の苦手な分野を把握した上で問題に取り組んだりする場を設定していく。
思考・判断・表現	粘り強く考えたり本当に必要な情報や資料を選んだりすること、考えたことを自分の言葉で伝えることに課題がみられる。自分の考えを表現するために、選択肢やヒントカードの提示・ペアやグループ活動の活用・手書きやICTの選択等、学習活動や方法の工夫について重点的に取り組んでいく。また、その選択を児童自身が自分の実態に合わせてできるよう支援するための手立てや、協働的な学びをより充実させるために児童の自主性を引き出す授業改善について検討していく。

①	今年度の課題と学力向上策		
	学習上・指導上の課題		学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	<学習上の課題> 各学年で習得する知識・技能の定着に個人差がみられる。 <指導上の課題> 児童の実態に応じた課題設定や、課題に対する意識づけなど学習活動の工夫。	⇒	既習事項の活用場面や振り返りを意図的に設定するなど、学習活動の工夫を行う。【大単元毎または学期末・適宜】 が学習や生活を自己評価する「がんばり表」の取組と連携させ、基礎的・基本的な知識・技能の定着を図る。それらの工夫や活用方法等を共有し、他教科にも生かせるようにする。【毎月末・10回程度】
思考・判断・表現	<学習上の課題> 全国学力・学習状況調査において記述式の無解答が見られる。 <指導上の課題> 児童の主体性を引き出す学習活動の工夫。課題に沿った振り返りの場の設定。	⇒	思考を可視化して表現し、考えを伝え合うことで、比較・検討する協働的な学びの場を設定する。それらの工夫や活用方法等を共有し、他教科に生かせるようにする。【通年・教科に応じて適宜】 宿題・家庭学習等でも自らの学びや生活を振り返ることができるようにする。「がんばり表」【毎月末・10回程度】

⑤	評価(※)	学力向上策の実施状況
知識・技能	B	既習事項を活用する場面や児童が自ら目標を設定し、学びを振り返る時間の確保を図ることで、個別最適な学びの充実を目指してきた。特に高学年では、児童自身で自分に合った課題を選択したり、協働的な学びのための相手を選んだりする学習形態も取り入れてきた。 令和7年度さいたま市学習状況調査の「知識・技能」に関わる領域において、平均正答率75%を上回る学年はなく、特に高学年の理科に課題がみられる。
思考・判断・表現	B	思考の可視化・考えの共有・比較や検討をし合う時間の確保を通して、協働的な学びにつなげることができた。個人で考えたり小グループで話し合ったりする等の学び方だけでなく、ノートへの手書きや共同編集ソフトでの入力をする等の表現方法において、児童自身に選択させる工夫をすることができた。 令和7年度さいたま市学習状況調査の「思考・判断・表現」に関わる領域において、多くの学年・教科で平均解答率が90%を上回っており、無回答率が低くなってきた。どの学年や教科においても、自分の考えをもったり表現したりできるように指導していく必要がある。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

②	全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	国語において、情報と情報の関係付けの仕方、語句と語句の関係の表し方の理解には改善が見られたが、時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いについては課題が見られた。また、算数では「図形」領域において、台形の意味や性質についての理解につまづきが見られた。 様々な言葉に触れる機会を増やしたり、基礎的・基本的な知識の定着を図り、それらを日常において活用していく学習活動をしたり、身近にある図形を取り上げてその構成要素に着目しながら特徴に気付けるようにする授業を今後も継続していく。
思考・判断・表現	国語の「話すこと・聞くこと」について、特に「目的や意図に応じて、日常生活の中から話題を決め、集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝え合う内容を検討することができるかどうかをみる」問題に課題がみられた。また、算数において、伴って変わる二つの数量に着目し、解決に必要な数量を見出し知りたい数量の大きさの求め方を式や言葉で記述する力を育てていくことが求められる。 国語、算数ともに記述式の問題において無解答率が高くなっている。問題を見比べたり見通しをもって取り組んだりするなどし、できそうな問題から取り組めるようにするなどの方策を行っていく。

- ①結果分析(管理職・学年主任等)
②詳細分析(学年・教科担当)
③分析共有(学年・教科別実態把握)

④	さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	全学年で、前年度と比較して算数の知識・技能においては定着がみられた一方で、国語、社会、理科では課題が見られる学年もある。高学年においては、国語や理科に基礎的・基本的な知識の定着がみられたが、社会の資料の読み取りや理科の顕微鏡や方位磁針の使い方等に課題がみられた。 学習した内容に繰り返し取り組み、学び方についても確認する機会を増やしていく必要がある。
思考・判断・表現	高学年では、前年度と比較して国語、算数ともに思考・判断・表現においては定着がみられたが、中学年の国語では、目的を意識して中心となる語や文を見つけ文章を読むことや、算数の折れ線グラフを正しく読み取ることなどにつまづきが見られる。高学年においても、社会のグラフや資料を読み取る問題等、知識・技能を活用する問題に課題がみられる。 既習した言葉や計算の定着を図りその上で知識を活用できるよう、複数の資料を用いた学習活動や、個人の課題に合った問題に取り組む時間、さらには協働的に学び合う時間等を確保していきたい。

③	中間期報告		中間期見直し
	評価(※)	学力向上策の実施状況	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	B	既習事項の活用場面や振り返りを意図的に設定するなど、学習活動の工夫を行う。 児童が学習や生活を自己評価する「がんばり表」の取組と連携させ、基礎的・基本的な知識・技能の定着を図る。それらの工夫や活用方法等を共有し、他教科にも生かせるようにする。	大単元毎または学期末に限らず、学習内容に応じて各時間においても適宜振り返りの場面を設定 「がんばり表」の取組状況については、変更なし
思考・判断・表現	B	思考を可視化して表現し、考えを伝え合うことで、比較・検討する協働的な学びの場を設定する。それらの工夫や活用方法等を共有し、他教科に生かせるようにする。 宿題・家庭学習等でも自らの学びや生活を振り返ることができるようにする。	変更なし

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)